

反合反帝の工場闘争を
プロレタリア日本革命へ

共産主義者党中央委員会

前衛

紙面紹介

共産主義者党規約

戦略戦術テーゼ 6 / 10 4

新中央委員会からの

アピール 2

大会報告 2

大会宣言 3

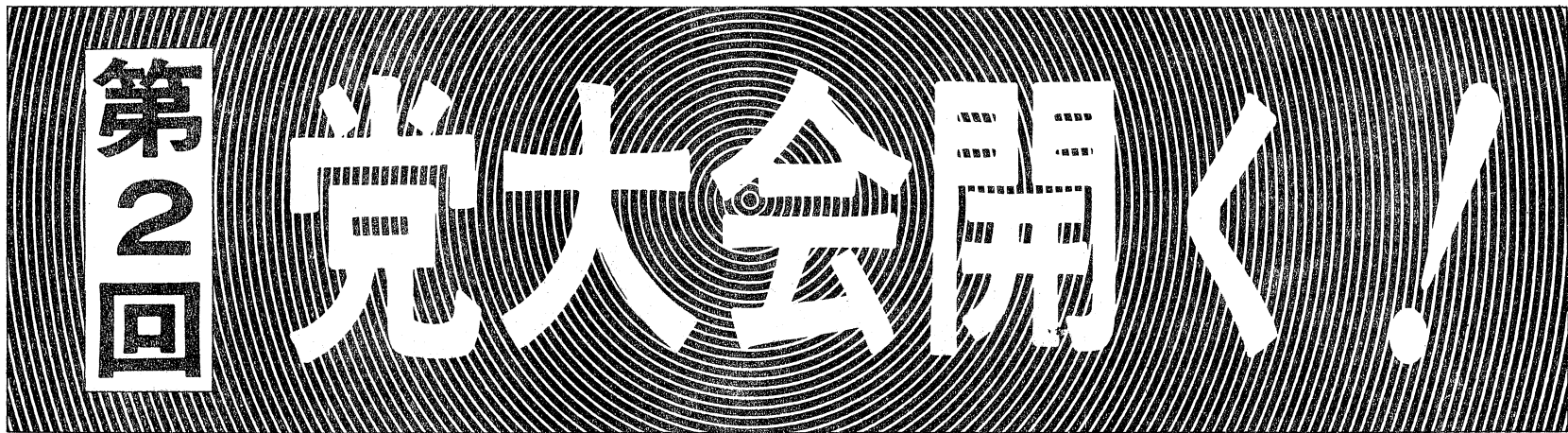
春闘決起集会

開かる 5

連絡先 振替「東京44589番前衛社」
千代田区飯田橋3-1-6飯田町ビル
前衛社 TEL(264)5079
購読料(郵共)1部60円・12回600円

前衛社

発行人 高橋一雄
毎月一日発行



共産主義者党のスローガン

■反合反帝の工場闘争を

プロレタリア日本革命へ

■工場占拠・労働者総武装

(二重権力)・武装蜂起のソビエト革命に
向けて進撃せよ!!

■工場職場に大衆闘争委員会を組織し、

工場闘争の大波をつくりだせ!!

■大衆闘争委員会を牽引する

工場職場行動委員会を組織し、
その地区的・全国的結合をつくりだせ!!

■すべての共産主義者、革命的労働者は

共産主義者党に結集せよ!

成果をひまへ 闘争の全国指導部へ

新中央委員会からの アピール

共産主義者党中央委員会

こうした最前線における闘いの実態について、またその経験と教訓について、すでに全党の同志は容易に語りつくせないほどの内容を自己のものとしている。

(四)

そして他方では、党の強力な指導と支援のもとにこうした戦線での闘争部隊・労働者行動委員会を首都圏レベルにおいて結集した首都圏労働者行動委員会連合が結成され、巨大な流れとなりつつある。共産主義者党中央委員会はこの闘いの先頭に立ち、これを工場占拠・労働者総武装・武装蜂起へと指導しねかなければならない。

とはいえわれわれは、また多くの弱点をかかえながら党建設の過程にある。われわれは一方で党首脳委員会のもとに工場細胞の飛躍的な発展・確立につとめているが、他方いまだそれを上まわる力をもたず、党の全国体制の構築へと前進しなければならぬ。階級闘争の巨大なうねりは全国をおおっており、全国党を通しての指導体制の確立なしには、革命的権力闘争は、その巨大な任務にたええられないのである。

一九七三年四月

わが党は一月協談会にもつとく任務を全党あげてとりくみ、第二回党大会を成功させた。

第二回党大会は二つの内容をもつ大会であった。

前半は「党名」を共産主義者党中央委員会と決定し、共産主義者党中央委員会規約を確定し、規約にもつとく新指導部・綱領委員を含む中央委員を選出した。

後半は「反合・反帝の工場闘争」とプロレタリア日本革命の戦略戦術テーゼを確定した。

このことは、工場占拠・労働者総武装（二重権力）・武装蜂起にむけての階級闘争の攻撃的・反帝・反帝の工場闘争をもつての「プロレタリア革命の前衛党としての任務を遂行することを公然と宣言するものである。」

(三)

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

こうしてわが党は、刻一刻と深化しつつある世界危機と、そしてこれにより現定された階級闘争の新たな高揚のなかに、まさにその最前線において自らを確立した。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

(二)

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

六八年十月以降、四年半におよぶ闘いを経て、われわれは共産主義者党中央委員会規約にもつとく、党指導部・中央委員会を選出した。中央委員会は、全国党の指導部としての巨大な任務に、名実ともに若かえった活力をもって、断固として立ちあがった。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

六八年十月以降、四年半におよぶ闘いを経て、われわれは共産主義者党中央委員会規約にもつとく、党指導部・中央委員会を選出した。中央委員会は、全国党の指導部としての巨大な任務に、名実ともに若かえった活力をもって、断固として立ちあがった。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

六八年十月以降、四年半におよぶ闘いを経て、われわれは共産主義者党中央委員会規約にもつとく、党指導部・中央委員会を選出した。中央委員会は、全国党の指導部としての巨大な任務に、名実ともに若かえった活力をもって、断固として立ちあがった。

第二回党大会 規約、戦略戦術テーゼ を採択し

新中央委員会を選出

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

全国の革命的労働者・学生諸君、

わが党は第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

全国の革命的労働者・学生諸君、

わが党は第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

全国の革命的労働者・学生諸君、

わが党は第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

全国の革命的労働者・学生諸君、

わが党は第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

全国の革命的労働者・学生諸君、

わが党は第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

全国の革命的労働者・学生諸君、

わが党は第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

全国の革命的労働者・学生諸君、

わが党は第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

全国の革命的労働者・学生諸君、

わが党は第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

全国の革命的労働者・学生諸君、

わが党は第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

全党の同志諸君、革命的労働者学生諸君、

全国の革命的労働者・学生諸君、

わが党は第二回党大会を現実的に準備した今春の第二回協談会。この工場闘争へのわが党の実践的取り組みの総括とそれを通しての党の指導性の確立を中心課題として開催された。このためにわれわれがつけやした長期にわたる内部討議は、労働者階級の革命的大衆組織にたいする党組織の指導性を生み出すことのできる革命党の組織原則・革命的集中制の原則を全党の同志諸君（にもつとく）確立した。そして第二回協談会では、さらに情勢テーゼを採択し、当面の任務方針を決定した。

(三)面へつづく

第2回党大会の 共産主義者党を工場

(二面から)

全党の同志諸君、革命的労働者、学生諸君、わが共産主義者党は先の一月党規約案を全党あげて討議し、第二回党大会において共産主義者党規約として決定した。

この規約は、「前掲」紙上で報告されているが、わが党の規約の特徴は、共産主義者党を労働者階級の前進部隊と規定し、「すべての労働人民大衆と全人類」に対する労働者階級の「歴史的任務」を簡潔に確認した。

この労働者階級に対する共産主義者党の「独自の任務」を確認し「共産主義者党の党風・組織の基準・規律・運営は全てこの目的と任務によって貫徹され、規定される」とした。

この規約にもとづき、党員の献身性と党の革命的健康を保つため、不断に、自発的に党運営に参加すること、日本革命を断固として遂行し世界革命の勝利をめざすことを規定している。

その組織の特徴は、日本帝国主義の国家権力を打倒するため、①工場占拠、②ヒート革命戦略にもとづいて工場細胞を基本とするところ、③中央集権国家とのたからしに耐える全国党であること、④革命的権力闘争の指導部としての非合法党であることを大前提とすることに表現されている。

さらに党規約八条において、党の革命的ダイナミズムを無限に引き出す、党運営の原則を革命的集中制として、革命的ヘゲモニーをもつ指導部の指導のもとに意思統一を行い、党員の自発性を最大限に引き出し任務の断固たる遂行を保障すること、党の指導部は常に党員に接して意見を聞き、最も厳しい点検を受けなければならぬとして、党指導部の独自任務を明らかにした。

さらにこの規約の遂行及び意思統一に際しては少数は多数にたがう、全地区は中央にしたがう原則をもたなければならないとした。こうした規約は党運営、任務の遂行、党生活の方針である。この組織原則を明らかにしたわが共産主義者党の規約は、日本における全共闘運動が提起した大衆の革命組織の原則と中国文化大革命の健康の復活を結ぶと同時に吸収しようとしてひき起した活力と混同を整理し、コミンテルン型組織原則を根柢から止揚するものへ高められたものからなる。

この規約前文の「自由について」の討論がなされ、共産主義社会における自由の問題とブルジョア社会における自由の混乱を総括し、教訓をもって新たな展開に

た。「自由」の問題を歴史的に位置づけ、人類総体の解放、自由の中で個人の自由が可能となるというところ、さらにそれは階級闘争の発展を通じて完成される現実過程であることなどの討論がなされ、党規約の解説書を準備することを確認した。

この組織原則を明らかにしたわが共産主義者党の規約は、日本における全共闘運動が提起した大衆の革命組織の原則と中国文化大革命の健康の復活を結ぶと同時に吸収しようとしてひき起した活力と混同を整理し、コミンテルン型組織原則を根柢から止揚するものへ高められたものからなる。

さらにこの規約前文の「自由について」の討論がなされ、共産主義社会における自由の問題とブルジョア社会における自由の混乱を総括し、教訓をもって新たな展開に

党規約にもとづき中央委員を選出

全党の同志諸君、革命的労働者、学生諸君、わが党は結党以来、理論、実践の諸活動を通じてコミンテルン以降の組織問題の深刻な総括となつた。自由について、ブルジョア社会における自由の混乱を総括し、教訓をもって新たな展開に

この規約前文の「自由について」の討論がなされ、共産主義社会における自由の問題とブルジョア社会における自由の混乱を総括し、教訓をもって新たな展開に

大会宣言

全国の革命的共産主義者諸君、革命的労働者諸君、

我々は第二回大会をもって共産主義者宣言し、党の「規約」と戦略・戦術テーゼ「反合反帝の工場闘争とプロレタリア日本革命」―共産主義者党の当面の任務―を採択した。

全国の革命的共産主義者諸君、革命的労働者諸君、

我が党の「工場占拠と労働者総武装(二重権力)―武装蜂起」の路線の下に結集し、反合反帝の労働者階級闘争に爆進しよう。

全国の革命的共産主義者諸君、革命的労働者諸君、

「工場占拠―労働者総武装(二重権力)―武装蜂起」の路線こそ勝利の路線である。資本主義国家権力のいかなる支配、暴

力装置といえども、数千万労働者人民の生産過程と結合した闘いと武装の前には敵ではない。そして労働者人民の真の統一と団結を闘いとするのである。「工場占拠」―ゼネストは労働者階級全体の事業に他ならず、「反合反帝の工場闘争」はプロレタリア人民大衆自身の闘いの一歩一歩であるからである。

「工場占拠―労働者総武装(二重権力)―武装蜂起」とそれをめざした「反合・反帝の工場闘争」こそ攻撃的な戦略―戦術である。工場、職場における合理化と職制支配こそ資本の搾取と抑圧、国家権力暴力装置を支える根本であり、それとの闘いを目的、意識化したのが我々の途であるからである。

議会議や組合や街頭での闘い、

その急進化を通じて革命をめざす路線はこれに対し、敗北と孤立、代行と受動的な途である。全国の革命的共産主義者諸君、革命的労働者諸君、

支配階級ブルジョアジーは、後もどりのでなく世界的危機を背景に、国家権力と合理化職制支配体制の強化に必死になつて

いる。それ以外に彼等が打つべき手をもたないからである。こうい

う中で我々は、勝利の路線を現実化している。いく多の重要な拠点の構築と首都圏を中心とした「工場占拠ゼネスト」の陣形配置に成功しつつあるのだ。

全国の革命的共産主義者諸君、革命的労働者諸君、

飛躍しようとしている。この結党以来の指導部の中に危機における革命党の厳しい試験から脱落、逃亡した者も僅かであったが、それは逆にわが党の党建設への集中的な作業を促進させた。

わが党は七一年一月全協協議会をもって、工場工作にはじまる工場闘争を各地区区活動を通じて取りこんだ。

わが党は六八年―六九年、全世界的な階級闘争の革命的な高揚とそれ以降の一時の後退によつてつくりだされた政治的勢力配置のもとで、工場占拠、労働者総武装(二重権力)―武装蜂起のソビエト革命戦略にもとづき、地区党体制の確立、工場細胞を軸とする闘争の前進を指導してきた。

いまや国際的階級闘争の一大合戦の序幕をめぐる階級闘争が、階級決戦をめぐる前段階的攻防の焦点となつていようことを明らかにし、わが党を備有名詞で主体を綱領委員、中央委員、を選出し、抜の指導体制を作りました。

わが共産主義者党は、綱領委員を会を中心に原則綱領草案の完成を含む戦略・戦術テーゼの深化をはかり、党綱領の完成をなすという作業に集中的にとりくむ体制を作りました。

これは本年一月の第二回協議会が第二回大会に課した任務に答えるものである。

この新テーゼについての討論は真剣に活発になされた。前半部分においてはベトナム革命の指導部をベトナムの人民革命党・労働党を備有名詞で主体を明らかにすること。

この新テーゼについての討論は真剣に活発になされた。前半部分においてはベトナム革命の指導部をベトナムの人民革命党・労働党を備有名詞で主体を明らかにすること。

わが共産主義者党は、革命的ダイナミズムを吸収した党規約を採択し、綱領委員会を含む新指導体制のもとに強固な団結を作りました。

わが共産主義者党は、革命的ダイナミズムを吸収した党規約を採択し、綱領委員会を含む新指導体制のもとに強固な団結を作りました。

わが共産主義者党は、革命的ダイナミズムを吸収した党規約を採択し、綱領委員会を含む新指導体制のもとに強固な団結を作りました。

わが共産主義者党は、革命的ダイナミズムを吸収した党規約を採択し、綱領委員会を含む新指導体制のもとに強固な団結を作りました。

わが共産主義者党は、革命的ダイナミズムを吸収した党規約を採択し、綱領委員会を含む新指導体制のもとに強固な団結を作りました。

わが共産主義者党は、革命的ダイナミズムを吸収した党規約を採択し、綱領委員会を含む新指導体制のもとに強固な団結を作りました。

テーゼを採択

全党の同志諸君、革命的労働者、学生諸君、

わが共産主義者党は当面の任務を規定する戦略・戦術テーゼ「反合・反帝の工場闘争とプロレタリア日本革命」テーゼを採択した。この「反合・反帝の工場闘争」テーゼは、第二回大会における「安

保」テーゼにかわるものである。この新テーゼの全体構成は大きく二つの部分に分れており、討論も二つの部分に分けて集中的に行なわれた。

第一の部分は結党以来わが党の実践を簡潔にまとめ共産主義者

して、職場闘争委員会、工場闘争委員会を提起した。共産主義者党を工場細胞を基礎とする全国党として建設することを新たな内容をもって確認し、満場一致で戦略テーゼを採択した。

共産主義者党の
もとに結集し
革命への戦列を
強化せよ

わが共産主義者党は、革命的ダイナミズムを吸収した党規約を採択し、綱領委員会を含む新指導体制のもとに強固な団結を作りました。

共産主義者党規約

前文

共産主義者党は労働者階級の前進党である。労働者階級は、すべての労働人民大衆をひきいて、帝国主義の国家権力を打倒する種々の支配権力を全世界的に粉砕し、労働者階級の世界的独裁を樹立すること、更にすべての階級搾取と階級支配を廃絶し、世界共産主義社会——各成員の自由で自覚的な結合を可能にする人類の目的意識的共同体を実現することを全人類に対する自らの歴史的任務とする。

共産主義者党は、この労働者階級の普遍的、世界的な任務を常に最も鋭く代表し、全ての階級闘争をこの歴史的任務の遂行に向けて組織し、指導し、おしよめることを労働者階級に対する自らの独自の任務とする。

共産主義者党の党風、組織の基準、規律、運営は、全てこの目的と任務によって貫徹され、規定される。

共産主義者党は、現代帝国主義の不断の支配・攻撃に対し不屈に英雄的に立ちあがる労働者人民大衆と固く結合し、指導し、共に闘わなければならない。

共産主義者党は、また、自らの革命的健康を保つため、ブルジョワ的諸関係が組織内部に流入することに最大の警戒心をもち、たえず党風をただしていかねばならない。

大衆との結合と不断の整風をとおして、党は限りなく生命力をわがものとし、目的を実現することが出来る。

共産主義者党は、党の目的のもとに結集し、党の定めの綱領・規約にもとづき、革命の勝利のため、党に献身する共産主義者によって構成される。党は党の目的に忠実であるべきことを要求される。それは、第一に、決意を固め、犠牲をとおして、党の任務の遂行に献身することであり、第二に、党の革命的健康を保つため、不断にかつ自発的に、党の運営に参加することである。すべての党員がこつた任務にこたえるべきである。労働者階級は共産主義者真のよびかたである。労働者階級の武器となる。

共産主義者党は、日本革命を断固として遂行し

ついで世界革命の勝利をめざす。

日本帝国主義の国家権力を打倒するために、党組織は、工場占拠・ソビエト革命の戦略に基づき、工場細胞を基本とする党組織であることを第一の原則とし、更に中央集権国家とのたたかいに耐えうる全国党であることを第二の原則としなければならない。第三に、党組織は、革命的権力闘争の指導部として、非合法党であることを大前提とし、合法・非合法のあらゆる分野での活動を担いうるものでなければならない。

共産主義者党の党員は、全生涯をかけて、みずから課せられた任務を果し、万難を排して、革命の勝利を闘いとおさなければならない。

Ⅲ 細胞

党の基礎組織は、工場細胞を中心とする諸細胞である。

細胞は三人以上によって成り立つ。工場などに一、二名の党員しかいない場合、これらの党員は近接の工場細胞などに所属する。工場等で仕事をしない党員も原則として近接の工場細胞に所属する。

細胞は党の基本的任務の遂行機関であり、その活動の場は工場大衆の中にある。細胞は工場内支配機構、国家権力に対する大衆の反乱を導き出し、これと一体となり、その先頭に立つて、指導権を確立する。

細胞は、そのために、共産主義の宣伝活動をを行い、新入党員を獲得し、党文章の作成配布、工場新聞発行、工場内の労働者教育等の活動を不断に行い、工場内に不拔の政治勢力を築くため全力をこらす。

細胞は、その指導部として細胞委員会を選ぶ。

Ⅰ 党の名称
共産主義者党と称する。

Ⅱ 党員
共産主義者党の綱領・規約を認め、党の一定の組織に属して積極的に活動し、党の規律を守り、党費を納める者は、党員として受け入れられる。入党を申請する者は二名の党員の推薦をうけて細胞に志願書を提出する。

党員の承認は、党細胞が行い、地区委員会が確認する。

Ⅲ 党の構成
党の構成は、工場細胞を中心とする諸細胞を基礎とした全国党として実現される。

党は、党の任務の遂行と党組織の発展に応じて、細胞・中央組織の間に各級の党委員会、すなわち、地区委員会、地方委員会等々を組織しなければならない。

その構成は、
イ 全国的領域では、党大会——中央委員会
ロ 地区的領域では、地区党大会——地区委員会
ハ 個々の工場・事務所・職場・学園では、細胞・党細胞委員会
ニ 各級党委員会は、党の各級組織の意思決定とその実践の遂行の全責任を負う。

また、各級党委員会は、党の任務遂行のため、機関紙誌、労働運動、学生運動等の専門部及び戦線委員会を置く。

中央委員会は、党の最高指導部である。中央委員会は党を代表し、政治的組織的活動全体を指導し、中央機関紙誌の編集局を設置し、党

財政を管理する。

中央委員会は党大会によって決定する。中央委員会は、任務遂行のため、常任委員会をおき、また必要に応じて、専門部及び戦線委員会をもつ。

また、中央委員会は必要に応じて、全国協議会を開く。

党は革命的集中制を原則とする。

党は、革命的ヘゲモニーをもつ指導部の指導のもとに任務を遂行し、意思統一をおこなう。指導部は、適切な方針の提示と指導によって同志的信頼を固め、党員の自覚性を最大限に引き出さなければならない。そうしてこそ、全党員の任務の断固たる遂行を保障し、また十分な協議を通じた固い意思統一を保障することができる。

党の任務の遂行及び意思統一に際しては、少数は多数にすがり、下級は上級にすがり、全地区は中央にすがり、という原則をもたなければならない。

党の指導部は、常に党員に接して意見を聞き、最も厳しい点検を受けなければならない。

党員は、党組織の決議にたいし異議があれば留保することができる。上級機関に批判と提案を行うことができる。

自由な主張・批判・提案と、規律ある態度・行動とは、全ての党員が党の目的を自覚し、たがいに同志的信頼をもち、努力してつくりださなければならない党風である。

Ⅳ 党の規律
党の規律は、党規約前文を最高原則として実現される。

Ⅴ 地区委員会
地区委員会は、地区の工場細胞を基礎として自らを構成する。地区委員会はその地区の党組織全体の指導部である。

地区委員会は工場細胞の調整、新たな工場への工作、地区レベルでの政治勢力のためのフラクション活動等の任務を遂行するため、常任委員会をおき、また必要に応じて、専門部及び戦線委員会をもつ。

地区委員会は定期的に地区党大会をおこなう。

Ⅵ 党大会
党大会は原則として一年一回中央委員会により召集される。また必要に応じて臨時党大会が開かれる。代表の基準は中央委員会もしくは全国協議会により定められる。

Ⅶ 党財政
党の基本財政は党費、特別募金、党事業収入その他によりまかなわれる。

党費の額は党大会ないし中央委員会によって決定される。

党費の納入は党員資格の重要な要件である。

Ⅷ 中央委員会
中央委員会は党の最高指導部である。中央委員会は党を代表し、政治的組織的活動全体を指導し、中央機関紙誌の編集局を設置し、党

(十面から)

また反帝闘争をこのついでに闘い、労働者

共産主義者党の当面の独自任務

共産主義者党は、日本の労働者階級の前進として、労働者階級が階級的団結をうごめ、自らを戦略配置につけ、日本革命の勝利をかちとることを当面の独自任務とし、労働者階級と固く結合し信頼をもち、指導し、共に闘わなければならない。

一、反合反帝の工場闘争を全国化せよ

共産主義者党が、現在遂行しなければならない主要な実践上の独自任務は、すでに工場職場の労働者大衆によって口火を切られ、広汎に燃え広がっている反合反帝の工場闘争を、結合させ発展させ全国化させることである。

1. 独自のたたかい

反合反帝の工場闘争の全国化の第一条件は、共産主義者党自らの闘いである。

われわれは、反合反帝の工場闘争に持久力と展開力を与える中核組織——行動委員会をあらゆる工場職場に組織し、更にその地区的全国的な連合を先行的におしよめるなければならない。そのため一刻も早く、独自の全国オトルケ団を創出しなければならない。

その際、われわれは個々の諸闘争を戦略配置の大目標から位置づけ、統一的な地域計画の一要として組織しなければならない。

現在の階級情勢とわれわれの配置からいって、われわれの主要な課題は、公労協戦線における反合職場闘争の突出、民間の自動車・電機戦線における独自の巨大工場をめぐる攻囲戦の貫徹であり、それによる拠点構築である。

階級は反帝闘争を将来、個々の工場闘争を工場占拠・ストライキへ飛躍させる有力なバネとして、役立つ。

共産主義者党は、労働者階級自身の豊かな創意の中から生まれる闘いの方法と組織を発見し、正しい革命戦略に位置づけ教育し、階級にもとづいて日本革命の勝利へと、労働者階級の闘いを導かねばならない。

民同と同盟系二組の角逐を軸に、日共、新左翼諸派がすべて存在して、不断の統一戦線と党派闘争が問われていること、第三に、企業そのものが全国組織を闘いの全国的波及に好都合であること、しかも第四に、われわれの行動委員会運動が全通の京浜地区の一角に影響を確立しつつあること、等である。

従ってこゝでわれわれの突出は、反合反帝の工場闘争の全国化の大きな突破口となりうるところである。

他方、民間の自動車・電機戦線を中心とした闘いも、旧新左翼潮流がほとんど有効な闘いを組織しえないでこれを放棄している中で、まわめて重要な位置を占めている。頂点をこえ立つ独占資本が、選別と系列を強化しつつ、部品製作から最終組立作業にいたる全工程の掌握と「コンビネーター」による一環した生産管理、そしてそれに見合う一環した労務管理体制の確立へすすめていることから、矛盾は系列中堅・中小企業に集中し、それが階級的攻防の焦点になりつつある。

従ってわれわれの闘いもまた、そうした周辺からせめぎあひ、攻囲して、本工場内部の闘いと結合することが要求されている。しかも特に自動車戦線では、最強の工場防衛隊——日産機動隊との対決が問われ、この攻防戦自身、全労働戦線に巨大な衝撃を与え、反合反帝の工場闘争を全国化する

春闘総決起集会

南部

四月八日、「春闘を反合、反戦の攻撃をしかけてきている。そして既成左翼労働組合の闘争が時代遅れになり新たな階級闘争の潮流が生れつつあり、その闘いこそ反合、反戦闘争を主軸にした行動委員会である」と強調された。そして、このような闘いを、今春闘の方向性としなければならぬ、とすなわち、反合、反戦闘争を主軸にした行動委員会を大衆闘争にかけつけ、更に職場闘争を闘いぬくことが明らかにされた。

学生戦線からは、筑波大学問題が報告され、その最大の特徴が七〇年安保闘争において最前頭に位置していた闘争学生に対する弾圧としてあることが指摘された。そのことから学生戦線の方向が七〇年安保闘争、全共闘運動の乗りこえられなかった地平を、南部地区運動の一環として当初から闘いぬくことが明らかにされた。

日電連合からは、二年有余にわたる日電下請けの職場闘争を通じ、日電を包囲する闘いを展開していること、日電の合理化攻撃を分析し、資本の再編を把握する必要があると述べられ、四月二十九日日電集会所で報告された。

M電機からは、資本の御用組合結成による労働者管理、労働組合結成をもつて対抗し、職場闘争を推進していることが報告された。

日電Q工場からは、資本の攻撃が、ZD、QC作戦等として具現化されていることも述べられ、女子が多いにもかかわらず、賃金を押えつけられていることが指摘され、そのような労働者を教育し、更に職場闘争を押し進めることが決意された。

電通料金労働者協議会からは、七一年十二月の大衆反乱から、今やその総括に立ち、組合の個別利益を超えて全ての職場労働者の利益を表現し、これを全面的に保障する組織「電通料金労働者協議会」の建設を求め、七二年春闘を圧倒的に勝利したと報告された。このように闘いに対する新たな資

四月八日、「春闘を反合、反戦の攻撃をしかけてきている。そして既成左翼労働組合の闘争が時代遅れになり新たな階級闘争の潮流が生れつつあり、その闘いこそ反合、反戦闘争を主軸にした行動委員会である」と強調された。そして、このような闘いを、今春闘の方向性としなければならぬ、とすなわち、反合、反戦闘争を主軸にした行動委員会を大衆闘争にかけつけ、更に職場闘争を闘いぬくことが明らかにされた。

以上を報告をうけ、次に具体的な工場・職場での闘いが報告された。

全通南部郵便労働者行動委員会の報告では、同盟・総評の組合宣言が、下部労働者の反乱をおさえ春闘をのりきりとなつては、日常的な職場闘争を生み出しているが、しかし職場闘争においては、日常的な職場闘争にみられる反乱闘争が、粉砕闘争により創出されていると指摘された。そして、今春闘をスケジューリング闘争におしこめようとする資本、省当局、総評・同盟と対決し、反合、反戦闘争の職場実力闘争「行動委員会」を大胆に押し進めることが明らかにされた。

Q電機の方からは、職業病の発生から患者による闘争、職業病を通じて闘争仲間を結集し、職業病と闘う会の発足を打ち取り、そしてこの職業病と闘う会の活動から、御用組合「二組」への攻撃、「一組」への介入、共闘を通じ、職業病闘争を一つの環とした反合、反戦闘争を御用組合として闘いぬくことが決意された。

レイ・オ・バックの新井さんからは臨時労働者の共闘として、加藤製作所のTさん、ソニーのSさんとの交流がもたれたことが報告され、地区的共闘を通じ、職場内から闘争組織の建設が急務であると訴えられた。

自動車においては、資本の合理化攻撃が、労働強化、残業の強要、休日出勤として具現化されてきていると報告された。そして御用組合において合理化問題、賃金問題を大衆闘争にかけつけ、更に職場闘争を闘いぬくことが明らかにされた。

学生戦線からは、筑波大学問題が報告され、その最大の特徴が七〇年安保闘争において最前頭に位置していた闘争学生に対する弾圧としてあることが指摘された。そのことから学生戦線の方向が七〇年安保闘争、全共闘運動の乗りこえられなかった地平を、南部地区運動の一環として当初から闘いぬくことが明らかにされた。

日電連合からは、二年有余にわたる日電下請けの職場闘争を通じ、日電を包囲する闘いを展開していること、日電の合理化攻撃を分析し、資本の再編を把握する必要があると述べられ、四月二十九日日電集会所で報告された。

M電機からは、資本の御用組合結成による労働者管理、労働組合結成をもつて対抗し、職場闘争を推進していることが報告された。

日電Q工場からは、資本の攻撃が、ZD、QC作戦等として具現化されていることも述べられ、女子が多いにもかかわらず、賃金を押えつけられていることが指摘され、そのような労働者を教育し、更に職場闘争を押し進めることが決意された。

電通料金労働者協議会からは、七一年十二月の大衆反乱から、今やその総括に立ち、組合の個別利益を超えて全ての職場労働者の利益を表現し、これを全面的に保障する組織「電通料金労働者協議会」の建設を求め、七二年春闘を圧倒的に勝利したと報告された。このように闘いに対する新たな資

世界革命

第四号

発売中

△ 総括・情勢
任務テーゼ

△ 共産主義者党
規約草案

統一戦線における党のヘゲモニーを確保し、統一戦線を原則的に発展させるためには、党の直接影響下に大衆的闘争組織とその運動が不可欠である。

地域段階における統一戦線は、工場職場闘争の発展を通じて、労働者大衆が地域にあらたな条件の中を以て、具体化する。だが工場職場労働者の総体としての現状は、まだそのような条件を備えておらず、そのことがまた、街頭を小フ

ル急進主義のつかの間の舞台となっているのである。われわれは一刻も早く地域段階の統一戦線の本格的な発展へつまずかなくてはならない。その際先導的役割をはたさるべきは、われわれの公企体戦線及び学生戦線である。

地域段階における統一戦線を提起する対象は、様々な政治党派そのものであり、その基礎は、反帝闘争及びその他の地域闘争を地区の工場闘争との結合を配慮して取り組むことである。

以上を任務を遂行して工場闘争を軸とする革命的権力闘争を全国的潮流におし進めること、それを通じて労働者階級をはじめとする労働者大衆を戦略配置につけ、日本革命を勝利に導くこと、このためには、共産主義者党自身が工場細胞を基礎とする強大な全国党に成長しなければならぬ。社会主義革命の歴史において、正しい戦略とたえぬかれた組織をそなえた革命党なしに革命が勝利したことはない。共産主義者党をそのような革命党として建設することこそ、全任務の最大の鍵である。

共産主義者党は、無数の工場細胞を建設し、それを基礎としなければならない。個別的多様な闘いとして開始されなければならない工場闘争は、工場職場内部の政治配置と動向を具体的にたえ、適切な方針を機軸に提起し遂行しうる高度の政治力、実践力をそなえた指導部を、しかもまたその個別的な多様な闘いを戦略に位置づけ、全社会的な政治配置と動向の中でたえかねず能力をそなえた指導部を要求するその指導部こそが工場細胞である。工場細胞なしには、前段階防戦の勝利の貫徹も、決戦も空語である。

工場細胞の成長こそが労働者階級の戦略的布陣の進展をはかる最重要なバロメーターである。共産主義者党は、この工場細胞を主要な基礎とし自らを全国党として建設しなければならない。前段階防戦として建設しなければならぬ。個別的な闘いとして開始されよう、それは全国的潮流化によって、全社会的、全国的な闘いに発展し、結合されなければならない。共産主義者党は、それを目的意識的に担うものとして、それを組織する党組織の骨格を先行的に作りださなければならない。そのための党独自の全国オルグ体制を確立しなければならない。

共産主義者党がこのような日本革命の指導部としての課題を公然と引き受けることは、しかし、党に日本階級闘争の全重量がかかることを意味す

2. 統一戦線

△ 共産主義者党を工場細胞を基礎とする全国党として建設せよ

共産主義者党は、実践・総括・方針一再実践を全挙げて正しく推進することを自らの厳しい任務とする党中央指導部を、過去の党活動の総括の中からつくりだした。共産主義者党は、革命的集中制をその組織原則として、すなわちこの中央指導部の指導のもとに堅く同志的に結束し、党員の自発性と創造性を最大限に発揮し、集中して、革命の目的実現につまずかなくてはならない。

△ 反合反帝の工場闘争をプロレタリア日本革命へ向け進撃せよ！

△ 工場占拠・労働者総武装（二重権力）・武装蜂起のソビエト革命に向けて進撃せよ！

△ 工場職場に大衆闘争委員会を組織し、工場闘争の大波をつくりだせ！

△ 大衆闘争委員会を牽引する工場職場行動委員会を組織し、その地区的・全国的結合をつくりだせ！

△ すべての共産主義者、革命的労働者は共産主義者党に結集せよ！

統一戦線における党のヘゲモニーを確保し、統一戦線を原則的に発展させるためには、党の直接影響下に大衆的闘争組織とその運動が不可欠である。

地域段階における統一戦線は、工場職場闘争の発展を通じて、労働者大衆が地域にあらたな条件の中を以て、具体化する。だが工場職場労働者の総体としての現状は、まだそのような条件を備えておらず、そのことがまた、街頭を小フ

共産主義者党は、実践・総括・方針一再実践を全挙げて正しく推進することを自らの厳しい任務とする党中央指導部を、過去の党活動の総括の中からつくりだした。共産主義者党は、革命的集中制をその組織原則として、すなわちこの中央指導部の指導のもとに堅く同志的に結束し、党員の自発性と創造性を最大限に発揮し、集中して、革命の目的実現につまずかなくてはならない。

反合反帝の工場闘争をプロレタリア日本革命へ向け進撃せよ！

工場占拠・労働者総武装（二重権力）・武装蜂起のソビエト革命に向けて進撃せよ！

工場職場に大衆闘争委員会を組織し、工場闘争の大波をつくりだせ！

大衆闘争委員会を牽引する工場職場行動委員会を組織し、その地区的・全国的結合をつくりだせ！

すべての共産主義者、革命的労働者は共産主義者党に結集せよ！

A 共産主義者党

わが党は、機関紙「前衛」に結集する共産主義者の結合体として、激動の六八年一〇月、学園占拠闘争の激発と、地区別闘争の高揚のまつたなかで誕生した。

この五月、フランス労働者階級は、二十万人の規模をもって工場占拠ゼネストに決起した。

決起した当のフランス労働者階級をはじめ、共産主義者自ら集結する集団の確ちがみぬけなかつたフランス五月革命の提起した本質問題を、いち早く、しかも適格に把握し、戦后体制の危機を帝国主義において革命に転化する戦略に定式化されたのはわが党を他には存在しなかつた。工場占拠—二重権力—武装蜂起—プロレタリア独裁樹立の戦略がそれである。

我が党は、学園占拠・街頭制圧闘争を、安保闘争の展開を通じて工場占拠ゼネストに転化させるというテーゼを掲げ、その実現に全力を尽した。にもかかわらず、地区別闘争は工場占拠ゼネストを引き出すにいたらず、学園占拠闘争は各個撃破されてしまった。七〇年安保闘争は、痛害にみまな敗北を余儀なくされた。

我が党はかきかかって職場支配秩序強化、警察国家体制の確立の安保異質化攻撃、追撃戦をいどむ国家権力に対し、革命的後退戦を唯一果敢に展開しつつ、七〇年安保闘争の敗北を国家権力と「左翼」にたいする二重の敗北とする経路をつかみとらした。

そして、血みどろの実戦と教訓をふまえて、七一年一月第一回党協議会をもって、我が党は、新左

翼の学生党的水準をのりこえ、既成左翼の体制の労働者党的飯面をはきこむ質を秘めた大転換—工場建設と職場、工場を基軸にすえた革命的権力闘争の展開をめざす工場工作の本格的着手—に全党をあけてのとりくみを開始した。

それ以降二年間の闘いをもとに、わが党は、すべての労働者階級・被抑圧人民を結集しつつ、国家権力、支配階級にたいし、戦略的反攻を具体的に準備する地平に、ついに到達した。

わが党は、この第三回大会において、党名を共産主義者党と決定するところを、わが党こそが日本革命の唯一の前衛党であることを、すべての労働者階級・人民ならびに共産主義者に公然と宣言する。

共産主義者党は、日本革命の勝利を、理論的にも実践的にも、終始一貫して保証しつづけるであろう。そして、全世界の労働者階級、いっさいの被抑圧人民との革命的連帯を追求しつつ、その支柱となり、世界共産主義革命を終局的勝利に導くことに全力を尽すであろう。

この公然たる宣言は、同時に、すべての革命的労働者、共産主義者ならびにその結果のよびかけであり、敵階級に対する公然たる闘争宣言である。すべての共産主義者、革命的労働者は、共産主義者党の中心に結集せよ！日本革命と世界共産主義の未来に向けて、ともに闘おうではないか！

共産主義者党の戦略と組織は正しく、不拔であり、その名は永遠である。いざ進軍を開始せよ！

第二次大戦とその戦後世界危機の収束以来三〇年近い歳月を経て、世界史は、ふたたびまた、世界危機と世界革命の時代に突入した。

再建し、発展させる政策をとった。

他方、すでに国内建設の困難とコンメンの破産とから、革命的推進力を失い、官僚制的変質を「スターリン主義」のイデオロギーおよび制度として定着させ、しかも第二次大戦とその戦後処理において、イデオロギー的に米英連合国の陣営にひきこまれたソ連は、しかし、革命を掲げるがゆえに、階級闘争の激化の中で、アメリカ帝国主義との対立を激化せざるをえなかつた。そして、連は、東欧において、ソ連軍の進駐のもとで、王制を撤廃し、ソ連の勢力圏の支配と統制を強化することによって維持されてきたのであった。

第二次世界大戦後の世界体制は、このように、米ソの対抗関係を軸として形成され、おたがいが自己の勢力圏の支配と統制を強化することによって維持されてきたのであった。

米ソを両極とするこの戦後世界体制の危機は、二つの体制の双方で、異なる原因、異なる内容をもっている。

資本主義陣営の側では、中心国アメリカのスタグレーションとそれによってひきおこされた下層階級の大破局によって、後進諸国、ひいては西ヨーロッパ、日本の帝国主義諸国が、国内経済政治危機に追いこまれた。これは、「社会主義」陣営の側では、官僚統制的、物質的・経済的「社会主義」建設のゆきづまりによる経済的危機がはじまり、それは同時にソ連に対する諸国の政治的軍事的ならびに経済的従属の体制としてあったワルシャワ体制の危機としてあらわれた。

そして二つの体制にあらたに開始された危機の階級闘争は、相互に結合しはじめ、またそれに対するアメリカ帝国主義の必死の抑圧と取引、ソ連の一面での支援と他面での取引への呼応を呼び起している。

こうしてあらたな世界危機は、二つの体制、二つの陣営にまたがる危機であり、あらたな世界革命は、米ソの対抗的世界支配の打倒に向かわざるをえない。

この世界危機は、すでに世界の部分に転落した資本主義にとって、相対的地位をますます低下させるアメリカ帝国主義に代り、この危機を資本主義的に克服し、世界市場を再編する強力な生産力の中心を欠いている。したがって、資本主義は、もはや全面的な再編によって再び安定的な発展を遂げることができないという意味で、まさに最後の危機に直面しているのである。

たがまた、それだけに、帝国主義諸国の支配階級、国家権力は、アメリカ帝国主義を中心とした支柱として、「恐怖の団結」をいっまで維持しようとし、政治的軍事的には、経済的にも、総力を挙げて必死に現状維持をはかろうとするだろう。そして、アメリカ帝国主義の卓越した政治的軍事的ならびに経済的力と、スタグレーションを起因とした下層階級のなすすべの性質は、そうした努力に一定の現実的基礎を与えているのである。

他方、一國の「社会主義」から「社会主義圏」へと拡大しながら、その革命的結合をなすえず、そしてまた、世界革命の担い手となることができないまま、「締めつけの強化」と「自由化」のあいだを右往左往しつづける諸国の現状は、資本主義体制から離脱するだけでは問題の根本的解決にはならないという事実を、いまや紛うことのない形で暴露している。

こうして、今日の世界危機は、さいこの危機を真にさいこの危機たらしめる主体のたつたまわる資本主義体制にとどめをさし、全世界の労働者階級・人民を共産主義社会の実現に向けて真に結集する主体、すなわち世界革命の戦略と過渡期社会革命の路線とともにそなえた前衛党の登場を要求する危機となつてきているのである。

危機が大規模かつ深刻であり、それを資本主義的に打開する展望が立たないこと、たかごを支配階級・国家権力は「恐怖の団結」のもとに、労働者階級・人民の犠牲のうえに現状維持による延命に必死の努力を傾けること、世界革命の指導部の未形成、未確立にもかかわらず、労働者階級・人民の反撃のたかきもまた必至であること、これらの事実は、このさいこの危機が、革命と反革命が世界的な規模で、大きな起伏をもって展開する壮大な一権時代となるに違いないことを示している。

革命と反革命が起伏をもつて展開する一歴史時代の開幕

第二次大戦とその戦後世界危機の収束以来三〇年近い歳月を経て、世界史は、ふたたびまた、世界危機と世界革命の時代に突入した。

工場闘争と日本革命の当面の任務

一、ベトナム革命

われわれは現在、一九六五—七〇年の階級闘争がひきたした階級関係のうえに、世界危機と世界革命のあらたな段階に立っている。

一九六五—七〇年は、再び開始された世界危機と世界革命の最初の段階であった。

ベトナムの人民革命党、労働者と英雄的人民のたたかいは、五九年、ドル体制の前段階動揺の

二、世界危機の第一段階とその階級闘争

しわざを受けるなかで、ソ中の参加によって生まれたジュネーブ協定とそれまでも踏みにじってアメリカ帝国主義に振り入れられた軍事独裁に対して開始された。このたたかいは、中国内部に開始された「総路線・人民公社・大躍進」の階級闘争と対峙論争のほけましを受けた。そして、六五年から、アメリカ軍の直接介入を迎えて、その世界支配に真向から挑戦した。

ベトナムの党と人民のたたかいは、世界史的意義は、第一に、中国革命が生み出し、それを勝利

に導いた根拠地人民戦争路線を、ヴェトナムの権力構造・階級政治配置の分析を踏まえて、具体化し、発展させたところにある。支配権力の弱体化と不安定という共通の条件を有しながら、他の後進諸国の階級闘争が、中国革命の単純な模倣、ないしは根無しケリラの域をこえることなく鎮圧されていった過程と比較するならば、それはいささか明かとなる。

ついで第三に、ヴェトナムのたまたかいは、史上最大の富と軍事力をもって築きあげられてきたアメリカ帝国主義の反革命軍事体制の一角を決定的に突き崩すと同時に、ドクトリンの破綻を促進した。これによって、ヴェトナムの党と人民は、アメリカ帝国主義の政治的・軍事的ならびに経済的限界を鋭く暴露し、全世界の労働者階級・人民にたいし、帝国主義の政治的軍事権力に真正面から挑戦し、これを打ち破ることができるとを明らかにし、かつ訴えたのである。

このことは、同時にまた、アメリカ帝国主義との「振制の対決」を通じて世界革命の振制の指導部の地位を維持してきたソ連に対する鋭い告発とその権威の突き崩しを意味するものであった。ヴェトナム人民の不屈のたたかいは、こうして帝国主義諸国を含む階級闘争の全世界的な高揚の最初の大波をつくりだす突破口を開いたのである。

2. 中国文化大革命

「大躍進」とその挫折を前段として、中国内部の階級闘争は、ヴェトナム革命戦争のほげまじと突きつけを受けながら、六五年末から「文化大革命」に突入した。

「文化大革命」の意義は、それが過渡期社会に固有な二つの傾向、二つの路線のあいだの死活的階級闘争の存在をばはめて実践的に明らかにしたところにある。

中国の党と人民は、物質的制約の拡大を主張した右派を打倒し、「三大差別」克服へ向かってさまざまな分野における「分業の発展」の追求、工場長の選挙制や工場内部の精神労働と肉体労働の分離対立の止境、高度教育制度の改革、農工分離の止境などの追求一をすすめるはじめている。これは過渡期社会の革命、共産主義建設の路線についての一つの創造的解答であり、同時に、ソ連「社会主義」に対する実践的批判を意味する。

こうして、ヴェトナムと中国を擁するソ連は、いちはやく世界革命の最初の主要な震源となった。この時期においてすでに、そのこの中国の右旋回を暗示する「文化大革命」の限界が存在した。その一つは、「文化大革命」が、毛沢東路線そのものの自己切開と上海コンテナーに鋭く開かれた権力機構の労働者ソビエトを基礎とした再編の徹底に至ることなく、いささかの責任の多少寄派への押しつけと「左派」の切り捨てによって收拾されたことであり、もう一つは、それと

密接に関連して、ついに正しい世界危機の分析をふまえて、中間地帯論に基づいた後進諸国の民族ブルジョア階級に迎合する傾向をめぐり、さらに帝国主義の革命を正しく位置づけた世界革命戦略とそれにもとく革命の対外路線の確立をなしたことがあったことである。

3. フランス 「五月革命」

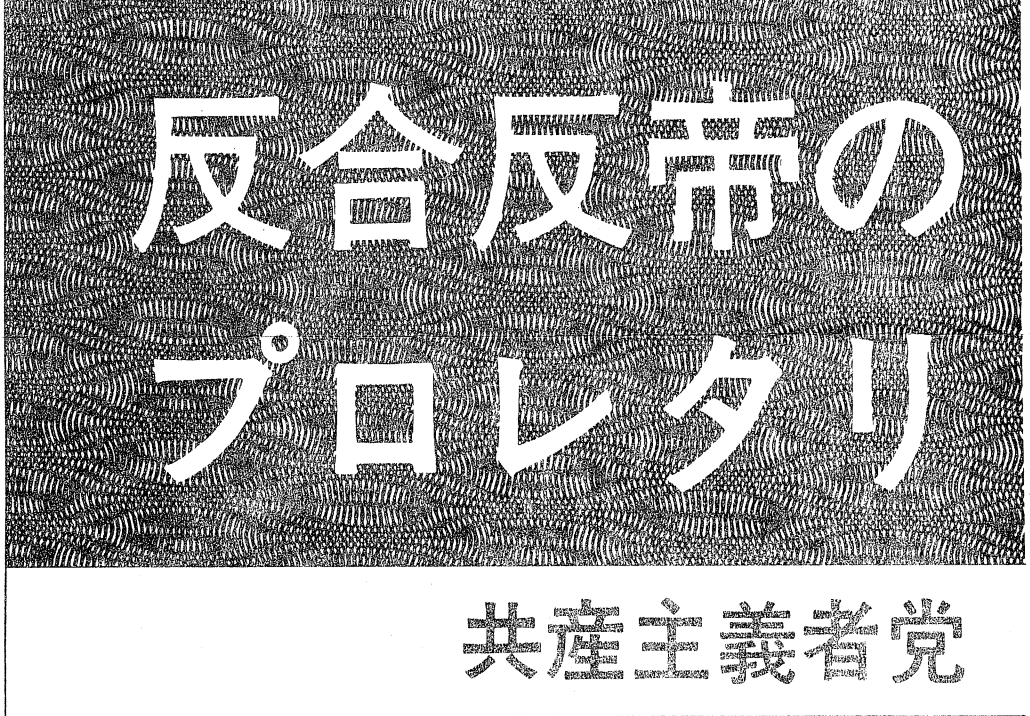
西ヨーロッパ諸国、とくにフランスでは、まず六〇―六三年に第一の労働争議・ゼネストの大波が生みだされた。だが、それがきびしい不況に直面した支配階級・国家権力の壁の前に打ち破られざるに、強権的な所得政策導入攻撃がかかる。共産党とCGT指導部はマヒ無力化し、所得政策崩壊の道へと決定的に踏み出した。しかしそれは同時に、工場現場底辺における下部労働者の独自の反乱的な闘いの開始の合図となった。そして、これら諸国の労働運動は短い沈滞ののちに、こう下からの圧力の高まりを受け、しかも既成指導部とあつたな潮流のつかみつきながら、六六―六七年に第二の争議・ゼネストの大波をつくりだした。一方で、メーデーのデモまで禁止するような全労働者人民大衆に向けられたきびしい警察国家体制が整備され、他方、争議・ゼネストのあつたな高揚のなかにもつたあつたらしい潮流が形成されてきたからである。フランス労働者の闘いは、六八年五月、羊園占拠、カルチエ・ラタン地区制圧闘争とその弾圧に呼応して、一千万労働者の工場占拠・ゼネストへと発展した。

敗北に終わったこの五月革命は、帝国主義諸国における権力闘争の核心問題を提起した。それは、第一に、フランスの労働者階級・人民が打倒の目標とした「ゴル体制」が、特殊フランス的な体制ではなく、当面する戦後世界体制の危機にさいし、帝国主義の支配階級が延命のために利用する主要な方法、強圧警察国家をもつて労働者階級・人民を抑圧し、搾取収奪を強化する執行権力独裁の先駆形態にほかならないということである。

そして、第二に、これを打ち破る革命の戦略的環は、工場占拠・ゼネストにあり、その主力は工場労働者階級でなければならぬということである。

第三に、こうした労働者階級・人民のたたかいは、工場占拠・ゼネスト、労働者総武裝（二重権力）、武装蜂起、プロレタリア独裁樹立の革命の勝利に発展させるには、これを指導しゆく不抜の前衛党が不可欠であるということである。敗北した「五月革命」は、これを裏返しの形で痛烈に表現した。

この間、東欧諸国でも、それぞれスターリン主義の間に、東欧諸国でも、それぞれスターリン主義



国主義の、七一年夏に公然と宣言された政治的軍事的ならびに経済的な世界政策の転換によって、そしてこれを補完するソ連の世界政策の変化によって、より深刻な第二段階に突入した。

しかし、それは当面、世界階級闘争の第一の高揚の収束の過程で形成された国内的な政治配置と、それを巧みに利用したアメリカ帝国主義の立ちまわりによって、第一の特徴を与えられている。すなわち、第一の高揚が退潮に向かうにたがって、階級情勢は、さしあたり、再び、だがより迫りこまれた形で、戦後世界体制のもとの取引関係が前面に出るものとなっている。

インドシナ人民の英雄的たたかいは、全面的に階級とアメリカ帝国主義の威信の完全な回復が到底不可能であると悟ったソ連は、ヨーロッパの「和解」をソ連の同意のもとにおすすすすめつつ、まず、中国を平和共存外交に誘いこみ、ついで、それを前提として、ヴェトナム、インドシナ革命戦争を「高地戦争」の枠内に封じこめる陰謀を企て、ヴェトナム革命の波及とアメリカ帝国主義の地位のこれ以上の後退に阻止をかけたようとした。これは「退きながらの現状維持」によって、多極化のなかにあつた「力の均衡」を見出そうとするものにはかならない。

そして、中国の既成の「国際政治」への抱きこみは、ソ連の対中軍事包囲下ウカンのたすけもあつて、当面完璧に近い成果を挙げ、そのためインドシナ革命もまた止むをえざる妥協に迫りこまれた。インドシナ人民は、当面、政治的なたたか

いに重点を移しつつ、たさざる部分的な軍事的攻防戦を展開しなければならぬであろう。

また、西欧や日本の帝国主義諸国では、一方に於ける、執行権力独裁への傾斜とその強権的抑圧および再びたがを締め直された所得政策、他方に於ける社共人民戦線型勢力の議会的進出が特徴となっている。

だが、同時に、この第二段階は、スタンプレーションとアメリカ帝国主義の「国内優先」の新経済政策によって激化されたドクトリン崩壊の新段階すなわちアメリカ帝国主義によって公然と宣言された為替通商戦争の段階によって、第二の特徴を与えられている。すなわち、異常に激化されたインフレーションと世界市場の不均衡、金に対して不渡りとなった諸通貨間の為替相場場の不均衡の動向、その機を捉えた為替通商戦争の激発、そしてその度毎に、さうさう心細い形に割りこられる「恐怖の団結」――これらが前面にあらわれてきている。

こうしたなかで、西ヨーロッパと日本の帝国主義諸国の支配階級・国家権力は、「恐怖の団結」下で犠牲を外部に転嫁することがままならぬだけに、それたけききい、工場現場の合理化と労働者階級の去勢を軸とする国内攻撃によって延命をはかろうとしている。そしてそれは、これまでの取引を目的とした既成の体制内階級闘争の基礎をさうさう掘り崩し、その既成指導部をいささか決定的に「マヒ」せつつある。

こうして、階級闘争の主戦場は、西ヨーロッパと日本の帝国主義諸国に移行しようとしている。

日本階級闘争の 現段階と 共産主義者党の位置

一、日本革命の戦略問題

1. 戦後日本帝国主義の根本性格

戦後日本帝国主義は、アメリカ占領軍による平和民主主義の憲法のもとで、天皇制国家権力の部分的解体とその実体である官僚機構の温存、再編、アメリカ占領軍による両者の結託による戦後革命の圧殺という第一段階、冷戦の開始と

世界危機は、ヴェトナム革命戦争と国内のスターグレイションによって迫りこまれたアメリカ帝

極端の緊張の激化を契機としたアメリカ帝國主義による極東の反共略略体制への日本帝國主義の動員、憲法をそのままだに単独議和と再軍備という第二段階を経て、その政治軍事体制を確立した。

戦後日本帝國主義の政治軍事体制は、第一にその国家権力を、二流の帝國主義の国家権力として、もはや独立したものでなく、国際的に、アメリカ帝國主義の世界的な反共軍事体制に依存し、その一環として持っている。すなわち、日本帝國主義は、對外政策の基礎を日米安保条約におき、その一極の傘下の庇護のもとに入らなければならない。その国内支配の基盤は、またアメリカ軍力に求めたのである。

だが狭い領域に人口を擁した島国でありしかも発達した工業国である。日本に予想される爆発的な反乱に対して、占領を終えた一握りの駐留外國軍隊がなすすべは限られており、本國からの軍隊の機敏な移動も政治的に制約をうけるに違いない。

したがって第二段は戦後日本帝國主義はその復活とともに、主として国内治安確保を目的とする独自の高度な中央集権的暴力装置を一旦して復活強化してきた。警察予備隊から発展した自衛隊と警察機構がそれである。

それらは旧帝國軍隊、警察から引き継いだ幹部体制のもとに、労働者人民大衆から徴集した傭兵隊であり、労働者兄弟同胞に銃を向けようとする特殊な政治教育、治安弾圧訓練をほどこされた反革命の暴力装置である。

この暴力装置を核に著しく肥大化し高度に中央集権的な行政官僚機構を、米軍を不可欠の補充物としながら、労働者人民大衆を政治的に支配し統治する日本帝國主義固有の国家権力の実体にならぬ。

それは固有の強さや弱さをもっている。それは個々の生産過程から分離され中央集権的に集中されて組織されているがゆえに、装備と訓練、機動力に向けて史上最強の階級抑圧組織の一つである。だがまたそのゆえに、生産過程の内部に直接的に入りこんで常態的に武装制圧することはできない。このため資本は危機に直面すると、生産過程に密着した私的暴力装置をつくり出し、これに依存しなければならぬのである。

そして第三に戦後日本帝國主義は、この国家権力に法治の形式を与えて「平和主義」と「民主主義」のイデオロギーをかざり、労働者人民大衆を、絶対多数を確保した自民党を支配階級国家権力の代表部とした議會政治体制のもとに統合した。

しかし、日本帝國主義の国家権力は、戦後によって天皇制という強力なイデオロギーの支柱を喪失したうえ、戦後危機の克服を占領軍にたよるねばならなかった。そのため権威としての独自の權威を確立しなさい。それはかりかたの皇軍の神話の崩壊から生まれた特殊に強い平和主義と

その憲法をそのままだに日米安保体制への動員と再軍備をおこなわねばならなかった。ここから自衛隊の特殊な弱点が生まれている。自衛隊は暴動に對して治安出動すべく準備されており、また必ず出動するであろう。しかしそれは強力な精神的支柱を欠き、國家の權威を体現するどころか日陰者の存在にとまり海外派兵もなしえず、したがって強度の機械兵器に依存した機能的サラリーマン軍隊として存在する。このため、日本帝國主義における国内治安確保の任は、それだけ重く異常に肥大化した警察機構とその機動力にかけられていた。戦後日本帝國主義は、また生産管理闘争に対する経営権の奪還という第二段階企業管理合理化と職場闘争の再戦という第二段階をへて、階級闘争を再編し、それを軸に政治軍事体制にまでもたらせ、かつそれを支える経済体制を確立した。

戦後日本帝國主義の経済体制は、第一に国際的にドル体制との上成り立つ多角貿易体制に依存し、その有機的環として存在する。すなわち日本帝國主義は、アメリカ帝國主義のドル散布、特に不安定な東アジアへの政治的軍事的経済的挺子入りのためのドル散布と、アメリカ市場とアメリカ資本の支配下にある資源市場を發展の不可欠の条件としたのである。

戦後日本帝國主義の経済体制は、第二に國家と融合した金融資本諸集團を經濟的支配とあぐなき搾取の帝王としてびえ立たしている。そしてこの國家と融合した金融資本諸集團は強力な労働管理機構と豊富な過剰人口を主要な武器として世界一の高積蓄を実現し、同時に階級闘争を根柢から変えていった。

この高積蓄の中から鉄鋼、石油等のコンビナートを中心とした臨海工業地帯と、日本帝國主義の心臓部が太平洋沿岸ベルト地帯に創出され、さらにはこれを結ぶ運河通信網が脈管神経系統として全國にはりめぐらされた。

この高積蓄は文字通りしり取りられた労働者階級と労働人民大衆の血と汗の結果である。しかもそれは同時に技術革新を通じて労働者の旧来の熟練を解体し、職場組織の解体再編と人間破壊をいっしょにおしすすめる、世界最強の労働管理機構と闘争力を破壊された労働者階級のそれへの隷屬をつくり出した。

世界最強の労働管理機構——それは、一企業の職場代表としての末端階級による職場の直接掌握、彼らによる企業第一主義の労働管理、そして彼らを担い手とする全労一同盟型の会社組合によるその補充を、主要な特徴としている。

労働者階級は、彼らのもので社会的には、大企業本工、臨時工、社外工、下請中小企業本工、臨時工、日雇い等として、工場内における細分化された職種と階層序列に分割されて、機械によりりつけられ、あぐなき支配、搾取と人間破壊にさらされている。

これに、新中間層や農民や東には中小零細企業主までもが、この金融資本諸集團の支配の網の目にさらされ、収奪をうけている。

この戦後日本帝國主義の政治軍事体制及び経済体制のもとで、総評民間を中心とした組合主義的春闘労働運動が第一の主要な戦後階級闘争として、更には、社会党を中心とした議會内反戦反政府闘争、及びそれと結合し、それに集約される総評を中心とした市民的、反戦反政府闘争が第二の主要な戦後階級体制内階級闘争として定着した。

しかし、春闘労働運動は、支配階級の生産性向上運動に對し、生産性向上合理化と賃上げを争取するものとならず、またそうすることで自らを圧力手段とした労働者階級の職場闘争力を切り売りしていた。

2. 日本帝國主義の危機とその政治力学

その政治力学

日本帝國主義の危機とその階級闘争は、世界危機とその階級闘争の端緒的開始とともにその一環として一九五五年に開始された。

日本危機の階級闘争は、それに固有な二つの力学を持つ。まず、日本帝國主義は、世界最強の重工業競争力を表現したが、ドル体制崩壊の中で再び固有のロックを展望しえぬ「もたざる」帝國主義として位置する。そのゆえ、生き延びる為には、唯一の武器、重工業の國際競争力にのみがきしかける工場職場の合理化を軸とした国内攻撃にすべてをかける他ない。そこから、日本帝國主義において、工場職場の合理化、労働強化、配賦人員整理攻撃を軸に、系列化、選別強化攻撃、及びそれを補足する国家ヘースでの財政合理化、インフレ収奪攻撃と労働者階級人民の反合同争を軸とする攻撃の隊列——この階級の攻防が危機の主要な力学の一つとなる。

だがまた、日本帝國主義は、世界危機にいち早く先駆的に世界革命の主要な震源となつたアジアに位置し、アジアに特に深い政治的、軍事的並びに經濟的関心を有する。それゆえ、アジアに開始され、日米安保を環とするアメリカのアジア戦略体制の一角を焼き戻しつつ燃え広がる革命に無関心でありえず、アジア反革命として登場し

よとする傾向を秘め、しかもそれを一環した路線として進めようとする力量を欠いている。そこから、日本帝國主義においては、支配階級、國家権力の共産主義「侵略」の恐怖、そして大國主義的愛國心をあおりながら、自衛隊を帝國主義軍隊として強化し、アジア反革命として登場しよとする攻撃及びその矛盾動揺と労働者階級人民の反合同争による攻撃の対決——この階級の攻防が第一の危機の主要な政治力学となる。

この二つの政治力学は相互に密接な関連をもつが、相対的に独自のものである。

しかし、反合同争もまた、労働者階級を主力とし、市民的政闘争と組合主義的經濟闘争の分離を止揚する革命的権力闘争として、工場を舞台とし、工場からあふれた形で闘われれば勝利の展望をわがものとしえない以上、その發展は、根本的には、労働者階級の職場闘争力を根柢から回復させる反合同争の發展によつて進むことになる。

当面する資本主義世界市場の大崩壊、ドル体制崩壊は、アメリカのスタグフレーションを背後にもつた一九三〇年代の再建資本体制崩壊とは著しく異なる。そしてそれは、国内恐慌による物価崩落、生産縮小、大量失業をもたらす、繰り返される不況の中で、工場職場の合理化とインフレ収奪の強まりを通じて、次第に「もたざる」自らはしかも米ソ世界支配が容易に世界の再編を許さぬものとして立ちあがらざるを得ない。もはや「もたざる」ナショナリズムによって大衆を結束する機運革命としてのナチ型革命が抬頭し、その余地はほとんど存在していない。むしろ逆に、國際的に支援された執行権力独裁が警察國家体制を強化しながら生き延びる余地は大きい。そしてまた一層の権力闘争を演出しつつ、体制から離反しようとする労働者人民大衆を吸収し、革命勢力を支配階級、國家権力に売り渡す人民戦線勢力が抬頭し、その可能性も大きくなっている。

したがって、労働者階級・人民の闘いは、國際的にアメリカ帝國主義に支えられ、ますます反動的な執行権力独裁、しかも人民戦線勢力との反革命同盟を利用して執行権力独裁という最も堅固な反革命を打ち破らねばならない。

この長期にわたる拠点構築の前段的攻防は反合同争を軸とする工場闘争であり、それは、敵の支配の間隙をつき、それを拡大するために遊撃戦争を主動的にし、体制をたて直した敵が反撃してくれば、必要に応じてしりぞくという遊撃戦争を基礎形態とする。そしてその展開の中から敵が容易に反撃してこれれ力関係を創出し、拡大強化していくことをめざす。

だが、こうした前段的攻防としての拠点構築の闘いは、持久戦の中の戦略的段階にあるとはいえず、多様な闘い方を必要とし、場合によっては、個々の戦場における、更には全工場規模における、決戦を主動的に闘わねばならない。

日本革命の過程は、以上のように、長期にわたる前段的攻防戦と武装根拠地形成による対峙とともたにたちまち問われる武装蜂起の即決戦という二つの質の異なる過程から成り立つ。

そうした武装根拠地は、敵軍力の全社会的マヒを追求しつつ、自らの権力を構築する闘いを通じて、すなわち工場占拠とネストの自衛武装を基にした二重権力として、日本帝國主義の心臓部、太平洋沿岸ベルト地帯に重なり合う形で構築されねばならない。それを軸とする階級の政治組織こそ、工場全共闘(ツビエト)及びその地区的全国的連合である。

工場占拠とネストの陣型のなめは、巨大なドラモンド型の資本集團の頂点に位置する民間重工業独占、特に内陸の完成品工業の独占を攻め落すことである。これに對し、武装蜂起の陣型においては、民間重工業独占を中心とした地区制圧が攻撃的拠点になるとして、運河通信網という産業の脈管体系及び軍需工業の掌握が、敵の分断と味方の結果及び武装のための特殊に重要な意味をもつ。

3. 日本革命の根本性格

この武装根拠地は、たまた革命が反革命への決戦をせまられることになる。日本革命の階級決戦は、この心臓部に存在する権力中枢に對する短期決戦である。

だが、こうした武装根拠地、しかも決戦に勝利しうる配置——戦略配置をもつ武装根拠地を創出するために、その前段的準備として、工場そのものの中に革命的権力闘争の拠点を構築しなければならぬ。

革命的権力闘争の拠点は、いづれでもなく、革命勢力が排他的に支配しうるものでなく、國家権力と資本の労働管理機構の支配に對抗し、その末端支配をマヒさせつつ、存在するものである。

工場の中にこのような拠点はいかにして可能かその条件は、第一に、日本の金融資本集團の城塞としての工場が、世界最強の労働管理機構を通じた資本の極度の専制支配の場であり、まさにそのゆえに、資本の労働管理は、労働者を結束しえず、労働者大衆の体制そのものに對する自然発生的な抵抗と反逆は不可避であること。

第二にこの抵抗と反逆を、真向から抑圧し、監視することによつて、資本の支配を補完しているもので、同盟型の会社組合とその取り引き労働運動であり、またそれを単なる取り引き労働運動におかして、労働者大衆を統合し、資本の支配を補完しているものこそ、総評とその春闘労働運動であるが、新たに開始された充分な取り引き代償を欠いた合理化攻撃のなかで、会社の第二労働課と化した苦慮処理機構が満足に果しえない前者は労働者大衆の増大する不満を吸収する安全弁として全く働かず、また後者も、その統合機能を使いこなし、怒りに燃えたる職場労働者大衆を孤立に離反させることとしたが、工場職場を舞台に、大衆的な革命的権力闘争を展開しうる条件が存在する。

第三に日本帝国主義の国家権力の、生産過程から分離して集中組織された中央集権的国家権力固有の組織的弱点、及び中核となる自衛隊に特殊なイデオロギー的組織的弱点ゆえに、支配にすぎ間があるとして、工場職場の舞臺上する大衆的革命的権力闘争の恒常的制圧をなさないことである。

このような条件のもとで、工場職場に戦勝を基

二、七〇年安保闘争の敗北

一 日本危機の階級闘争の第一段階

1. 七〇年安保闘争における学園占拠・街頭制圧闘争の高揚とその敗北

アジアの革命が保ち得る階級の攻防を契機として、六八年秋を頂点として学園占拠・街頭制圧闘争を爆発的に高揚させた。それは七〇年安保闘争を鋭く特徴づける同時に、日本危機の第一段階の階級闘争を代表する闘いとなった。またこれは、フランス五月革命に示された工場占拠・学生占拠の特殊日本の先駆であり、権力問題を提起する闘いであった。

しかし、こうした部分的、自然発生的な反乱は労働者階級の工場占拠・学生占拠に発展することなく強化された国家権力・機動隊のつづし攻撃によって挫折させられてしまった。

この闘いにおける政治配置の特徴は、第一に、社共、総評の議案主義的組合主義的左翼が、もはや反戦反政府闘争の主導部として現れなかったばかりか、反乱する学生、市民、労働者自身の傘下にある労働者大衆との分離に全力を尽し、それに成功したことであった。

これは、根本的には、高層階級の相対的合理化によって、総評を主軸とする労働運動が最も根源的な職場闘争力を創出して無力化し更に会社と同盟一体の組織破壊攻撃によって身動きのとれない状況に追い込まれていたからであった。しかも、六四―六五年不況を機に始まった工場職場の階級的攻防は、大型景気の実現によって一端緩和され無力化したなりに取り引き労働運動が生じ延びることを許されたからである。

準に主動的、攻撃的に闘いを計画組織する党と大衆の重層的な結合、すなわち党―行動委―大衆闘争委の不抜の連帯をつくりだすなら、それこそ支配階級・国家権力が容易に崩しえぬ力関係をもつ革命的権力闘争の拠点となりうるであろう。すなわちわれわれの闘いは、このことを裏証している。

このように条件のもとで、工場職場に戦勝を基

準に主動的、攻撃的に闘いを計画組織する党と大衆の重層的な結合、すなわち党―行動委―大衆闘争委の不抜の連帯をつくりだすなら、それこそ支配階級・国家権力が容易に崩しえぬ力関係をもつ革命的権力闘争の拠点となりうるであろう。すなわちわれわれの闘いは、このことを裏証している。

このように条件のもとで、工場職場に戦勝を基

準に主動的、攻撃的に闘いを計画組織する党と大衆の重層的な結合、すなわち党―行動委―大衆闘争委の不抜の連帯をつくりだすなら、それこそ支配階級・国家権力が容易に崩しえぬ力関係をもつ革命的権力闘争の拠点となりうるであろう。すなわちわれわれの闘いは、このことを裏証している。

このように条件のもとで、工場職場に戦勝を基

準に主動的、攻撃的に闘いを計画組織する党と大衆の重層的な結合、すなわち党―行動委―大衆闘争委の不抜の連帯をつくりだすなら、それこそ支配階級・国家権力が容易に崩しえぬ力関係をもつ革命的権力闘争の拠点となりうるであろう。すなわちわれわれの闘いは、このことを裏証している。

このように条件のもとで、工場職場に戦勝を基

準に主動的、攻撃的に闘いを計画組織する党と大衆の重層的な結合、すなわち党―行動委―大衆闘争委の不抜の連帯をつくりだすなら、それこそ支配階級・国家権力が容易に崩しえぬ力関係をもつ革命的権力闘争の拠点となりうるであろう。すなわちわれわれの闘いは、このことを裏証している。

このように条件のもとで、工場職場に戦勝を基

「翼」としての流れをつくりだしている。動労の反闘争への革マル派の関わり、全通戦線における社労同解派の関わり、都労活、全労活をとおしての長船、中核派、解放隊等の関わりがそれである。

これらはすべてが同一ではないが、しかし根本的には、労働者の一定の戦闘性と結合していることにもかわらずその戦闘性の原動力となつていく職場実力闘争の戦略的位置づけとその発展方向に即するものではなく、従来の戦闘的組合主義の枠の中におさえこまれてしまつて、根本的な限界をもつている。その典型は革マル派であり彼らは露骨に闘争の反動的な萌芽への抑圧、敵意を表明している。

これにたいし、長船に代表される、戦線統一との攻防を追求している部分は、赤色労働組合主義の復活をめざすこと、一定の方向をさし示している。しかし、これはあまりにも視野を限定するものである。なぜなら、日本の革命的プロレタリアートに問われているのは、真の革命的権力闘争を担う革命的大衆組織の創出、工場職場闘争委員会の地獄的・全面的結合であり、産別戦線はその補足的役割をはたすにすぎない。中核派、社青同はいわばこうした点の中間に位置する。

⑤ 既成左翼の統制、更には新左翼のセクツ的な支配統制からも離反して存在する工場職場の独立諸グループ。彼らこそ反合反闘争の工場職場闘争の掘りおこしに最も積極的な役割をはたしつつあるし、その数も拡大している。

危機のあらたな段階における諸階級の政治配置と動向は、来るべき日本社会主義革命が、反合反闘争の工場闘争をとおしてプロレタリア革命であることを、すなわち、労働者階級、反合反闘争を軸とする階級闘争をとおして、工場占拠労働者総武装(二重権力)、武装蜂起にいたる革命である。

4. 共産主義者党の位置

以上のよきあらたな政治配置への再編において、共産主義者党の占める位置は決定的に重要である。

七〇年安保闘争の敗北は、危機にいったん形成された階級闘争の全社会的対抗軸の喪失を意味した。

しかし、あらたに再び工場職場の合理化をめぐる攻防が、社共による議会主義的な「擬制の対抗軸」の展開を露払いとして、再び形成されはじめている。そして工場闘争を革命的権力闘争として展開する真の革命党の抬頭を要求されているのである。

わが党は、すでに七〇年闘争を総括し、革命的権力闘争を工場闘争を軸として闘う路線と運動へと転換を遂げた。そして現実には公企体戦線において、また民間重工業の自動車、電機戦線等において、反合反闘争の大衆的職場闘争を展開し拠点構築にすすみつつある。

しかも、わが党は、七〇年闘争を総括し、党のしんを、この厳しい任務の遂行に耐えうる真の革命党を育成する新左翼諸派の学生党的水準をこえた真のプロレタリア党として建設してきている。こうして共産主義者党が、反合反闘争の階級闘争に汎汎に立ちあがり始めた労働者階級を真に革命に領導しうる唯一の党派にほかならない。

D 労働者階級の当面の任務

1 反合反闘争の工場闘争をプロレタリア日本革命へ

危機のあらたな段階における諸階級の政治配置と動向は、来るべき日本社会主義革命が、反合反闘争の工場闘争をとおしてプロレタリア革命であることを、すなわち、労働者階級、反合反闘争を軸とする階級闘争をとおして、工場占拠労働者総武装(二重権力)、武装蜂起にいたる革命である。

は労働者階級は、激烈に長期化するに違いない支配階級、国家権力に対決する闘いをおとす、革命的階級としての団決をうち固め、自らを、そ

1. 前段階攻防戦としての反合闘争

労働者階級が、現在遂行しなければならない重要かつ第一義的な実践上の任務は、反合反闘争の工場闘争の組織化である。

反合反闘争の工場闘争の基礎は、反合闘争でありその核心は反合理化を課題として、職制支配のマトリクスをめぐり職場実力闘争、すなわち反合反闘争の職場実力闘争である。

工場職場の合理化とは、現段階において支配階級、国家権力の国内攻撃の軸となつており、しかもそれは、資本によって工場に組織された労働者の編成の基礎単位である職場に集中されている。そしてこの合理化攻撃にたいして反合闘争は、職場を主要な舞台とし、単に個々の合理化に対する改良ではなく、合理化の直接の担い手であり、またその目的でもある職制体制そのもののマトリクスにたいして闘わなければならない。

反合闘争は、従って、職場における権力闘争である。なぜなら資本は職制体制による労働管理、職場秩序の維持によって、労働者を強制して生産と搾取を実現しようとするのであり、従ってこの根幹にふれる闘いに対しては、非妥協的に中央集権的な国家権力を発動し、更には危機的な国家権力の形態として、企業ごとに組織した工場防衛隊やガードマン等の暴力的私兵を登場させて、その粉砕に全力を挙げることである。

こうして反合反闘争の職場闘争こそは革命的権力闘争の端緒であり、日本階級闘争の光栄ある伝統に定着したその合言葉は「抵抗から職場の主人公へ」である。

そして労働者階級が、反合反闘争の職場闘争を核心とする革命的工場闘争の組織化を第一義的な実践的任務としなければならないのは、それが単に現在の階級の攻防の重要な課題であるからではない。それは日本革命の決戦にいたる前段階攻防戦の意味をもっているからである。

2. 反合反闘争の工場闘争を組織せよ

力を骨抜きにするのである。従ってこの攻撃を職場でうち破ることなしに、労働者階級は階級決戦の戦場に登場することはできない。

この攻防戦をとおして、工場内部に革命的権力闘争の拠点を創出し、決戦に打ち勝てる配置を築きあげることができると、それとも合理化と職場の牢獄化、革命的労働者の放逐が先行的に貫徹され、空しく街頭で粉砕の仕掛けをされる運命をたどるかこそ、現在労働者階級に突きつけられている革命の死活の岐路を意味する。

われわれは、前段階攻防戦としての反合闘争を革命的工場闘争の基礎にしっかりとすえ、更にインフレ、生活破壊攻撃と対決する大巾貫上げ、一時金闘争等をも同時に推進しなければならない。

なぜならアメリカのスタグフレーションを基点としたなし崩しのドル体制崩壊の中で、支配階級国家権力の国内攻撃は、工場職場の合理化を軸としながら、同時にインフレ収奪の主要な補完物として、従ってまた、賃金闘争があつた意味をもつてあるからである。

このような条件下の賃金闘争は職制権をも逆につひきつ、分析することができ、しかも合理化攻撃が賃金体系の合理化をともなっている以上、賃金闘争はそれ自身、多くの場合、反合闘争として闘うことができる。また闘わなければならない。賃金闘争をこのように闘うなら、それは当初、個別職場に限定される反合反闘争の職場闘争を全工場規模に拡大する有力な契機として役立つであろう。

反合職場闘争は、反合反闘争の職場闘争を核とする革命的工場闘争の組織化を第一義的な実践的任務としなければならないのは、それが単に現在の階級の攻防の重要な課題であるからではない。それは日本革命の決戦にいたる前段階攻防戦の意味をもっているからである。

職をたまたまこまれたばう大な数の職制階級の育成、労働者の格付け、本工・臨時工・社外工等の差別を通して労働者大衆を分断支配し、更にこれを第二階級と化した職制組合の監視によって補充している。従って反合職場闘争は、去勢され特殊利害集団に分割された労働者階級を、その意識状況に応じた課題と闘争形態の適切な選択によって結束させ、下級職制をも逆に分断するよう周到な計画性、攻撃性、政治力を要求する。こうした質をもった大衆闘争を基礎としない限り、反合職場闘争は敵の攻撃に耐え発展することはできない。

工場闘争の出発点は様々である。通常ゆるい結合の運動体の形成が先行するであろう。そしてまた会社の組織する安全会議や組合の職場分金等を出発点として利用しよう。

問題はそれをどの方向に発達させるかである。反合職場闘争の中から職場労働者の大衆闘争機関として生まれてくるのは、形態や名称はさまざまあれ、職場闘争委員会である。これは圧倒的多数の職場労働者大衆自身の組織、すなわち彼らが自ら闘争を計画し決定し、自ら実行する組織である。

このような職場闘争委員会の工場単位の連合が大衆的な工場闘争であり、来るべき戦略的攻防の時期には、これらを直接の原型として、工場占拠ゼネスト、労働者総武装(二重権力)、武装蜂起を担う階級的大衆組織——工場全共闘、工場代表者会議(ビエト)を登場させなければならないのである。

だが、ひとたび開始された大衆的な反合職場闘争を革命的権力闘争として持続し、発達させるためには、形態と名称はさうであれ、高度に政治的に訓練された中核組織——われわれはこれを行動委員会と呼ぶ——を欠くことはできない。なぜなら革命的権力闘争としての反合職場闘争は、それによつて容れざるやいな弾圧攻撃を受けるが、闘いの非和解性を自覚し、闘いを周到に計画し、そのヘゲモニーを堅持して闘うものが、それによって成長することができるからである。

行動委員会は、かくて大衆的な反合職場闘争に持久力と展開力を与える中核組織である。その任務は、職場労働者の圧倒的多数を職場闘争委員会に組織し、反合職場闘争を大衆的に闘うことに更に自らを政治的に高めつつ、闘いを全工場規模、全社会的規模に拡大発展させることにある。

行動委員会による工場工作は、行動委員会を中核とした味方の存在とおおまかの体制が敵に知られたときには、すでに簡単に攻撃されたい関係をつくりだしていることが必要である。しかしこのことは、身の安全をはかることのみ汲々とした、いたすらに時を浪費する消極策を是認するものではなく、無難な、大衆の前に公然と登場することを回避し続けるなら、職場労働者の過半が自ら参加する大衆的職場闘争の組織化は永久に不可能である。全工場規模の大衆的職場闘争を

目標にした具体的で細心の立案と大胆な実践が問われている。工場職場に組合、特に戦闘的組合が存在し、それが戦闘的活動家集団によって支えられている場合には、彼らとともに組合内の形式をとった職場闘争委員会を組織し、組合執行部に対しては「幹部闘争から大衆闘争へ」「職場に決定権を」等の周知の合言葉のもとに、逆手戦術を駆使しつつ職場闘争委員会連合の組織化と発展をおしすすめることができる。

首都圏行動委連合
機関紙
連帯
毎月10・25日発行

労働者階級は、反合闘争を組織しつつ、同時にそれを基礎として、反合闘争をはめとする諸闘争を工場を軸とする地域闘争として独自に組織しなければならない。

反合闘争は、現在、組合主義的労働運動に反対して、議会主義的に集約される市民的政治闘争の形式をとっており、さしあたり地域闘争として闘われなければならない。

だが労働者階級は、反合闘争を市民的政治闘争として闘い、革新自治体や社共勢力の街頭補完物におしとどめるのではなく、革命的権力闘争として発達させなければならない。そのためには、底辺運動を通じて、工場闘争に結合し、更に反市工場闘争を軸として再編しなければならない。

なぜなら反合闘争は、工場闘争を軸として結合され、労働者階級を主力とするところによつてのみ再び革命的ダイナミズムをとりもつてくるからであり、労働者階級自体がその大衆的職場闘争の発展のうえに政治ゼネストをうち、地域制圧にあふれる場合に、始めて中央集権的な国家権力の暴力装置の壁をうち破りうるからである。反合闘争がそれ自身で階級情勢を打開できるかのようによつて夢想するのは、小ブル急進主義以外の何ものでもない。このことは、六〇年代における労働者階級本体的街頭政治闘争の不発が、主として工場、職場における合理化の貫徹によって彼らが戦闘力を喪失したためであることをみればたちまち明らかである。

(四面へつづく)